

論文審査の要旨

報告番号	総論第	24号	学位申請者	五月女 さき子
審査委員	主査	山崎 要一	学位	博士(歯学)
	副査	田口 則宏	副査	中村 典史
	副査	宮脇 正一	副査	田松 裕一 J

**Development and validation of the psychological scales for oral health behavior
- self-efficacy scale and locus of control scale -**

**口腔保健行動に関する心理尺度の開発と妥当性の検討
- 自己効力感尺度およびローカスオブコントロール尺度 -**

口腔内を清潔に保ち、う蝕・歯周病を効果的に予防するためには、歯科医療の専門家が行うプロフェッショナルケアと、患者自身が日常生活の一環として行うセルフケアとが有機的に連動していなければならない。これまで患者の行動変容は、歯科保健指導前後における口腔清掃状態の変化を客観的に検討するにとどまり、行動変容をもたらす患者側の内的要因、例えばやる気(モチベーション)や気づき等を評価する変数や尺度は確立されていないのが現状である。

そこで学位申請者は、口腔保健行動に関する心理尺度を開発してその妥当性を検証し、予防プログラムへの尺度の有用性を検討した。

対象者は鹿児島大学歯学部 3, 4 年生と医学部保健学科 2 年生の計 185 人(男性 76 人、女性 109 人、年齢: 男性 23.7±2.7 歳、女性 20.9±1.7 歳、対象者全体 22.0±2.6 歳)であった。既存の尺度項目に、臨床現場で実際に行っている指導内容や表現を加えた尺度原案を作成し、調査対象者には自己効力感尺度(SEOH)は 5 段階、ローカスオブコントロール(LOCOH)は 4 段階の Likert 尺度の下で回答を求めて評価をした。原案に対して因子分析を行い、因子構造を確認した。因子抽出はスクリープロット、累積寄与率をもとに総合的に判断して行い、因子負荷量 0.4 以上として項目を選出した。各因子に対して因子負荷量の大きい項目を参考にして因子名を与えた。さらに口腔保健に関する知識を含む全般的意識およびブラッシング等のセルフケア行動の実態を把握する 30 項目からなる質問紙調査(OHQ)を並行して作成し、同様に実施した。

その結果、以下の知見が明らかにされた。

- 1) 項目分析により 25 項目からなる SEOH を作成して因子分析を行った結果、「ブラッシング行動に対する自己効力感」、「生活習慣に対する自己効力感」、「心理的統制に対する自己効力感」、「健診行動に対する自己効力感」の 4 因子が抽出された。SEOH は特性的自己効力感尺度と有意な相関が認められたことからその妥当性が示された。ロジスティック回帰分析により、男性では OHQ の 8 項目で、女性では 10 項目で SEOH と有意な関連を認めた。
- 2) 項目分析により 16 項目からなる LOCOH を作成して因子分析を行った結果、「口腔保健に対する内的因子」、「口腔保健に対する外的因子」の 2 因子が抽出された。LOCOH は一般的ローカスオブコントロールと有意な相関が認められたことからその妥当性が示された。LOCOH 総得点、口腔保健行動に対する内的因子得点および外的因子得点のすべてにおいて、SEOH と有意な相関が認められた。

従って、作成された SEOH、LOCOH 両者は有意な信頼性と妥当性を有していることから、口腔保健行動を予測し、その変化を評価するのに有用であること、また SEOH と LOCOH の併用は、口腔保健行動に関するモチベーションや技術の評価および予測に有用であることが示唆され、臨床応用可能であるという点で非常に興味深い。

よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。